

多様な「生きる」はおもしろい！

YO-RO-ZU

月刊「よるず」Vol.16 (2019/1)



©各誌編集者/印刷/発行/編集/デザイン

【こことからだ】



言葉に色があることを知らない人は
モノクロの言葉ばかり届ける
言葉は色だと知る人は
相手に応じて自在な言葉を届ける
言葉、すなわち、色
色、すなわち、私

「たった一人のあなたを救う」
公益社団法人日本駆け込み寺
ご相談は ☎03(5291)5720

なぜ埋葬や墓を始めたのか

僕たちは、基本的には西洋医学を学んで医師になりますが、その過程で「死」について学ぶことは、ほとんどありません。病気をどう治すかの勉強はするけれど、「生きる」というテーマそのものは宗教と哲学のものだと考えていますから、死に関してはなおさら医学から遠くなっています。そのことに僕自身は根本的な疑問を抱いていました。

それは、自分が子どもの頃に病弱で、入院を繰り返していたことも関係しています。「生きる」とか「死ぬ」ということについて、どうしても考えざるを得なかった子ども時代から、生きるエネルギーとは生と死の緊張状態から生まれた駆動力のことではないかと考えていました。誰にでも生と死と

心と体を探究する意味

● 医師・東京大学医学部付属病棟病棟医助 稲葉俊郎

稲葉俊郎 (いなば、としろう)

いう相矛盾する力が内包されていて、それらが両方向から引き合っているために「生きている」という状態が保たれている。それなのに、医学は死を知らずして生のみを語ろうとしているのではないかと、思ってきました。

そうしたパーソナルな問題として意識し始めた生と死ではあつた

のですが、それが今の医師という仕事に結びついていったのは、お墓や埋葬に関して関心を持つようになったことが関係しています。人にとって埋葬やお墓の意味は何なのか？ と考えたときに、もしかしら太古の人間も死について考えたり疑問を持っていたのではないかと思に至ったのです。

僕らが具体的に意識できる死は、身近な人が亡くなる「二人称の死」で、情報として誰かが亡くなったことを知るのは「三人称の死」です。でも、自分にとって最も切実な「二人称の死」だけは永遠に抽象的です。なぜなら、自分の死は生きた状態で体験できないからです。死という世界は、切実であるけれど抽象的な死と、実際に目の前にして悲しむ具体的な死が結合しているのです。

永遠に体験できない自分の死は謎に満ちて、それゆえの不安があらわれてくる。これが人類が最初に遭遇した大事件だったのではないかと想像します。しかし、不確かな自分の死というものを捉えようとするとときに、イマジネーションや抽象的な思考能力というものが育てていったはずで、埋葬やお墓といった儀式やシンボルもそうし

て生み出したのではないかと思います。つまり、死というものに内在する具体と抽象の纏り合わせによって自分の存在の意味を保とうとした結果の表現なのではないかと。そうしなかつたら自分が引き裂かれてしまうからです。

ですから、僕にとっては生も死も同じテーマなのです。自分の死を考えれば、二人称や三人称の死とどのように纏り合わせるのかを探究せざるを得なくなり、それが自分の生の意味を求めることにもなると考えたとき、生と死のあいだにある人々を生かすために自分は何ができるのか、という止むに止まれぬ気もちが生まれて医師になりました。

二〇一一年に東北で震災が起こったときは、現地でお手伝いをしながら、亡くなつていく方々を目の前にしているうちに、医療とし

て応えていくためにはやっぱり死というものを学ばなければならぬと改めて考えさせられました。そこで勉強し始めたのが能でした。能の謡や舞いは鎮魂の意味を持つ表現ですが、そこが医療には欠けていることを自分自身で謡や舞いをするほどに痛感しています。現代社会では、能が表すあの世とこの世の接点が失われています。生と死が纏り合えていない分断された状態です。そこに社会全体の致命的な裂け目が存在していることを感じて、なんとかその裂け目をつなぐことはできないかと思いつながら医療現場にいます。

裂け目をつなぎとめるもの

一般的に、医学などのサイエンスは「HOW（いかに）」の探究をするものだと思われていますが、本来は「WHY（なぜ）」に答えて

いくものだと僕は思っています。しかし、直接「WHY」には答えることができないので、便宜上、「HOW」にすり替えているだけです。それでも「WHY」は「HOW」と同時並行的に進んでいるのに、現代のサイエンスは「HOW」だけで済ませようとしているかのようにも思えます。そして、そのことが僕には生のことしか学ばない現代医療とクロスして映るのですが、「HOW」が「WHY」から派生したものだということを忘れてはいけないと思っています。「HOW」と「WHY」もまたエネルギーを生み出す緊張状態にある関係です。「WHY」は宗教者や哲学者に任せればよいと思われていますが、個々人が自分の宗教と哲学をもつべきです。裂け目をつないでいくのは、そういうところからであるような気がしています。

す。

社会での裂け目をもたらすのは、細分化された情報で作られた閉鎖的で小さなグループが、自らを絶対化し他者を否定するあり方です。しかし、一つのことに固まつてしまったグループからは問いが生まれにくくなつてしまいます。異なるものとの接点がなくなるからです。だから、情報の細分化の流れに乗ってさえいれば何とかなるという意識が大勢を占めて、全体をバラバラにしてしまうことへの抗いが僕の中にはあります。より源流（ルーツ）の方向への意識を取り戻したいと願っているのですが、そうすると摩擦を感じることも少なくありません。それでも、芸術の世界や文学の世界には同じように源流を目指しながら表現をしている人たちがいます。あることの専門性を持ちながらも常に人間と

しての根源を追究しようとしている人たちと出会う場には、「HOW」と「WHY」が同時に存在していますし、その出会った所から新たに始まることなくさんあることも実感しています。それは、もう一度僕の専門である医療に立ち返つて、新しい医療のかたちを生み出していくことでもあるのです。

医学部の学生たちが行っている勉強会で言うのは、いろいろな問題を自分にとっての問いに変えていくことこそ個々の役割であり、自分の存在意義を確認することにつながるということです。そうすると、自分自身が何らかの表現をする必要があるし、表現を磨いたり工夫していく努力も自分自身の問題なのだと分かってきます。伝わるためにはどうするかと考えていくことは、社会の致命的な裂け

目をつなぎとめていく具体的な行為ですし、分かりやすく言えば、他者との「通路」を開いていくということだと思います。

怒りや憤りや悲しみも表現の一種だと思います。ただ、それをそのまま出してしまうと、単なる感情でしかありません。何かにかたちを変えて、例えば絵を描いてみるとか、文学に転換するとか、そういう工夫一つで裂け目がつながっていく。その行為が「芸術」だと思います。

芸術は医療であり平和運動

三越デパートの包装紙「華ひらく」や、上野駅の壁画「自由」などで知られる画家の猪熊弦一郎は、戦後の荒廃した日本を見ながら、「日本に美を分かる人をもっと増やしていきたい。美を分かる人こそ平和を求める人だ」と言ってい



ました。その猪熊が「美術館は心の病院である」と信じて、香川県丸亀市にMIMOCAという自身の美術館を創設したのはじくなる二年前でした。それが猪熊にとつての芸術であり、大きく言えば平和運動であつたのだらうと思ひます。

僕自身は生命や人間の探究によ

つてそれができるはずだと言ひ続けているのです。何億年にもわたつて、いのちのバトンが正確に伝へ続けられてきたことを感じるだけで、必然的に平和というものを意識し始める。そのために僕はさまざまな表現を通して医療を少しでも前進させたいと思ひ、そのことが僕個人の平和運動なのだろ

史上最大の激動を迎えていたわけですから、単にエンターテインメントとして能を生み出したわけではなく、引き裂かれる日本人の苦悩から能が誕生したのだと考えざるを得ません。

西洋医学がやつてきた「病氣学」も身体的な「各論」を明らかにしたり治療していくうえで大事であるのは間違ひありませんが、〇〇病というものは誰かが決めたものでしかありませんし、治療すべき悪であるという前提で捉えるのも間違ひしているような気がします。僕自身がやつていきたいのは「健康学」です。そのときに、「寿福」という示唆は僕自身の存在を意味づけるものとして受け取ることもできるのです。病氣や先天的な障害の有無にかかわらず、「どう生きるのか」という個々の命題にコミットしていくことのほうが

根源的な医療の役割であるように思ひます。

随所に命の探究の入口が

僕には、生きることの大事を掴みたいという気持ちがあるんです。そして、少なくとも生きていく間、常に自分の伴走者として存在しているのが心と体だと考えると、生きることの何たるかを問むためにも心と体のことは知りたいたいと思ひわけです。ちゃんと知ることなくして伴走者と付き合うことができるのか、という自問があるからです。

ありがたいことに、日々、心と体を探究する機会には誰にでもあります。水一滴でさえも、わずかに分間の瞑想をするだけで違つて見えてくる。「なぜ変わつて見えるのか？」と問つて自分で心や体を探究することはできます。分

うと考えています。医療と平和を分断しない、命と芸術を分断しない、医療と芸術も分断しない、そうした意識が全体性を見据える目を養ふのだと思ひます。

「そもそも、芸術とは、諸人の心を和らげて、上下の感をなさんと、寿福増長の基、遐齡延年の法なるべし。きはめきはめては、諸道ことごとく寿福延長ならんとなり」

これは、世阿弥が書き遺した『風姿花伝』の中で言つていることですが、つまり、能もすべての道の神髄も「寿」と「福」を増やすことだと言ひます。これには、しびれました。世阿弥がすべてを包括してつくりだした能は、まさに医療のことではないかと思へたし、命のための平和運動のようにも思へたのです。世阿弥の時代は、天皇が二派に分かれるという日本

がちがたく存在している感覚と感性への気づきが生まれるはずで、そうした無限の発見と学びの連続を僕たちは生きていますし、発見と学びの一大イベントが病氣や死なのだらうとも思ひます。大事なことは、そうした感覚や感性と付き合つていくこと。それが生きることのベースになつていくのではないのでしょうか。

そういう積み重ねを日々行つていく人と、「水は水でしま」としか捉えていない人とは、おそろしく「どう生きるのか」という方向性が異なるだらうと思ひます。瀬戸内海にある豊島美術館の内藤礼さんの「母聖」という作品は、水や命を体で感じさせてくれますが、一度でもそうしたことを体感していると、心と体に対する気づきが増えていくはずで、

言い換えれば、それは自分が存

おなかの赤ちやんを通して「おのずから」の生も自分の中にあるという、「おのずから」と「みずから」のあわいを体験します。妊婦さんでなくても、人は六十兆にもおよぶ細胞という「おのずから」の命によって生きています。それを思うだけでも、自分への探究を始めることができます。

そして、自分自身は知らないけれど、この世にいる誰もが、お母さんのおなかから産道を通って命がけで出てきたことは間違いないことです。だとして、今何があっても、死にたくなるほど絶望しても、自分が命がけでここにやってきたことを思い起こしてもらいたい。どんな人にも自身の命を育ててもらった時期が必ずあったはずですし、いま生きていること自体が「生かす力」のほうが大きかった証拠でもあるわけですから。

在する世界を捉えていくことでもあり、同時に自分自身の探究でもあるわけです。その意味で、芸術と医療は「メビウスの輪」のようにつながり合い、関わり合っているように思います。例えば、夕陽を見て感動している自分がいて、それを視覚の話として論じるのではなく、特定の感覚器官に分けることのできないあらゆることの動員による夕陽という体験であり、風という体験であろうと思うのです。そのときに、「なぜいま心が動いたのか?」「この、うわーと熱くなってきたものは何なのか?」「なぜ涙が自然と出てきたのか?」といった問いが自分に向けられていく。そのことを僕は心と体の探究の入口が開かれていく瞬間だと思っています。

妊婦さんは、自分自身は「みずから」の生を生きながら、同時に、

心を語るというよりも、心と呼吸されているものを生み出すもの、あるいはその過程、それを僕は表現していきたいと思っていますし、それが新しい医療のかたちを生み出すことになるはずだと信じています。

稲葉俊郎（いなば・としろう）

医師・東京大学医学部付属駒場医院産科内科助産師
一九七九年熊本県生まれ。古来の日本は心と体の知恵が芸術・芸能・美・道へと高められ心身の調和が予防医療の役割を果たしていたという仮説を持ち、自らも能楽の稽古に励みながら、さまざまなジャンルとの対話を行う。著書に「こころを生きるからだ」の世界で生きていくために考える「いのちのこころ」「いのちを呼びさますもの」心とのこころから「共善」に見えないものにも耳をすます。音楽と医療の対話がある



(1,800円+税/春刊)

本来は、呼吸も付けずに全体として捉えていくべきだけれど、便宜上付けられた心と体のことが時代と共に分断・分化されていく流れをくい止めるためにも、立場が弱い人や、表には出てこない声なき声に耳を傾けていく必要があります。問題や障害や病気というものは、時代や条件が変われば僕にもあなたにも現れていたはずなのだから、善悪論で論じることではないし、無関係だと考えて済ますことでもないはず。そうしないと、全体として捉えるべきことがますます分断されてしまう気がします。

心、体、命、と称されているものを、そのまま分かった気になってしまうのではなく、「それはいったい何なのだよ」とそれぞれに探求していくのが人生だろうと僕は思っています。そういう問いが

あるからこそ、心や体や命が触れ合っている他者のことも大事にしなければいけなくなる。そして、最終的には「なぜ自分は生きているのか?」という哲学的な問いと重なってくるような気がします。その問いはそれぞれの日常の暮らしの中で答えていくものであって、だからこそ個々の命や人生が大事なのだと思います。

地表の水も、地下水も、やがては大海に注がれ、その後蒸気となり、雨となつて再び地上へと巡っていく。その循環の過程でさまざまなものと触れて影響を与えていく。心の線相もまたそれと同じだと見ることが出来ます。心を動かすエネルギーも、水の流れのようなものだと考えてみれば、水が滞りなく流れ続けていることが大事だと感じられるでしょう。自然にはすべての学びがあります。